

知盛 逍遙

嵐
圭史



知盛
逍遙

嵐
圭史

早川書房

知盛逍遙

一九九一年六月十日 印刷
一九九一年六月十五日 発行

著者 嵐 あらし 圭史 けいし

発行者 早川 浩

発行所 早川書房

東京都千代田区神田多町二一二

電話 東京三三・三三二(大代表)

振替 東京・六一四七七九

印刷所 享有堂印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります

Printed and bound in Japan

〈検印廃止〉

ISBN 4-15-203478-5 C0074

知
盛
逍
遙

目 次

潮が西へ走り始めた！ 7

“全曲上演”をどう捉えるか 15

木下順二氏は何故“文学的欠落”への挑戦とあえて言ったか 24

デクラクメイション・考 70

論理と感覚の世界 115

文体と構造 130

子午線の視座 145

影身よ！ 158

永遠の時間の中を、幕が静かにおりて行く 171

幕の外で（Ⅰ）
宇野重吉先生への手紙

179

幕の外で（Ⅱ）
鎮魂賦——母へ——

209

あとがき

221

潮が西へ走り始めた！

これから私がしたためようと思うのは、演技の記録ではない。いうところの作品論でもない。さりとしてエッセーでもないだろう。あえて言えば、それらを^な縋^まい交ぜにし、ごった煮したかのようなとりとめもない雑文に近いものである。

木下順二氏の手による大曲『子午線の祀り』において、“知盛”という優れて魅力的、かつ責任ある大役を演じさせて頂いた一人の役者として、その創造過程で私が学んだこと、知り得たこと、思いあつたことなど、それこそ卑近な事柄もふくめて、いわば創造の現場からの報告めいたものをまとめてみたい。知盛を演じた者の、それはむしろ責任というものかもしれないと思うからである。

今回の第四次公演（一九九〇年三月・四月、前進座劇場、大阪中座、東京青山劇場その他で上演）は、作者である木下順二氏の提唱による“全曲上演”という形で、ほぼ原作通り、ノーカットでの上

演に挑んだのであるが、それは私にとって恰好の、原点に立ち帰っての再創造の場となった。戯曲を、演出を、演技を、つまりは作品そのものを捉えなおす、絶好の機会であったともいえよう。私はこの作品で、多くの素晴らしい出会いをした。『子午線の祀り』という、おそらくは現代戯曲史を彩るであろう傑出した作品との出会い、作中人物「新中納言知盛の卿」との、少しく大袈裟だが運命的な出会い、あるいは作者、演出家、スタッフ、キャストとの、さらに言えば観客との、さまざまな出会い……。

役者稼業に身をおく人間として、こうした邂逅を持ち得ることのできた幸せはやはり、*“役者冥利”* につきる、とでもいうところだろうか。

考えてみれば*“出会い”* という事柄そのものが、人間社会、あるいは人生の中できわめて運命的でありはしまいか。同時に、それは多分に必然的な面を合わせ持っており、人間誰しもが、この点ではわけへだてのあるはずがない。

そのような意味でも、運命や、必然といったことをあまり遠くに追いやらず、存分に自分自身に引き寄せて私達が立っているこの地点、つまりは日常の視線で見つめなおしてみると、一見難解と思われるがちな『子午線の祀り』という労作が、非常に今日的で、大衆性に富んだ戯曲であることを再発見できるかもしれない——そうした組み立てが、この作品にはさまざまな形で仕掛けられているようにも思われるのだ。

知盛を演じた者の立場から、いわば、嵐圭史という一役者の『全生活的視線』で、『子午線の祀り』の世界をしっかりと見定めてみたい。それがこの作品の持つ生命力、あるいは普遍性について、一つの、ささやかな検証となることを願いながら。

*

一九七九年『子午線の祀り』初演以来、私自身の周辺をふくめてさすがに十年一昔、世の中はいろいろに様変わりをし、時間は確実に動いた。

『子午線の祀り』総演出にあたった宇野重吉氏すでに亡く、私の所属する劇団（前進座）の総帥であった中村翫右衛門大先輩も今はもういない。そしてこの二月（一九九〇年）、私は母を失った。私の劇団についていえば、この間に『前進座劇場』を建設し、劇団運営も全面的に代が替ったといえるだろう。

また東欧での一連の歴史的な大変動は、まさに『時代の大きなうねり』を、私達に実感させてくれるに充分であった。そしてこの実感は、いつ、どの地点に身を置こうが、同一の時間——歴史——を共有しているのであり、同時に今、生を得ている私達一人一人はきわめて小さな存在であるにしても、『時代』の観察者、証言者の一人であり得るということをも、示しているのではないだろうか。

知盛 潮が、潮が西へ変り始めた！ 潮が西へ走り始めた！

一九九〇年代初頭の現時点において、このせりふの持つリアリティを一体なんと表現したらよいだろう。私はほとんど言葉を失うのである。

十二年前（一九七八年）に、木下順二氏が『子午線の祀り』を発表した当時、劇的な東欧社会主義圏の崩壊を予測していたわけでは勿論ないだろう。したがって、あざとく現代を当て込んで書かれたせりふではさらさない。

このせりふ自体は、およそ八百年がほど前にさかのぼる元暦^{げんりやく}二年、源平雌雄を決する壇の浦の戦いに、平家方の決定的敗北につながる「潮の逆流」という冷徹なる自然法則の現象を前に、知盛の口から絞り出されるように吐かれる言葉として設定されている。しかし偶然というにはあまりに偶然すぎる、なんと出来すぎたせりふであることか！

月の引力とも決して無関係ではない「潮流の変化」という自然現象は、源平の運命を決する物理的な決定打となったのだが、しかしそれは、必然がもたらした一つの現象との遭遇にすぎず、しかもその必然を知盛は充分に知っていた。いや、その必然を知ろうとしたが故に、必死に自己を問いつめ、探り、その結果として現実^{じゆんじつ}に立ち向かい、あらがって生を燃焼させたればこそ知盛

は、自らの運命——木下順二氏の言葉を借りれば歴史的必然——をも見定めることができたといえよう。

「平家物語」巻十一の中で、ほんの数行の場所をあたえられているにすぎない、例の「見るべき程の事は見つ」という言葉も、こうした木下順二氏の手による知盛への深い洞察と、魂の再生があったればこそさらに光彩を放つのであるが、「潮が、潮が西へ変り始めた！ 潮が西へ走り始めた！」というこの言葉もまた、単なる自然現象の認識に止まらず、それまでの知盛の行動の全軌跡と相まってはじめて、一つの、時代の区切りを見事に捉えたせりふとして、普遍的生命力を持つことができたのではなからうか。

そうした象徴的意味合いにおいて、それはまさに、ベルリンの壁の崩壊と照応するといっても過言ではないだろう。

もっともこれらの現象をして、『子午線の祀り』の作意と安易に結びつけて論じるのは、いささか短絡に過ぎて私自身あまり好きではないし、第一、作者にとっては迷惑なことやも知れぬ。だが作意はどうあれ「今」を生きる私（達）からすれば、どう払拭してもしきれぬ「歴史の転換点」という共通の事象において、普遍的な真理を看取せぬわけにはいかないのだ。

事実私は今回の上演では、今までの上演時とは違っておおいに、しかも敏感に「現代」に反応した。「潮が西へ走り始めた！」というこの言葉を口にする知盛、そのせりふを言っている私自

身の身体の中を、満身創痍ながらも、懸命に再生への道を探らんとしているソ連という国——集團——の、孤軍奮闘しているかに見えるリーダー、ゴルバチョフの幻影が一瞬突き抜けていったのである。

*

『子午線の祀り』の中で描こうとした作者の思いは、実のところ平家でもなければ知盛でもなく、平家物語ではさらにはない。

「平家物語」を下敷きに、知盛の、義経の、阿波の民部重能等の姿を借り、さらに、木下順二氏その人の意識の分身とも思われる、影身の内侍といわれる巫女を誕生させ、あるいは、群読という一つの表現手段を有効に活用しながら創り出したその小宇宙は、厳として存在する自然の法則の中であって、それでも瞬時の生を全うしようとする人間の営みへの賛歌であり、運命——歴史的必然——の非情を知りつつ、なおかつ人間を愛おしみ、慈しみ、その行為に万全の信頼を寄せようとする、作者木下順二氏の思想、人生観そのものだったといえよう。

『子午線の祀り』という戯曲は、そのような作者自身の哲学を表現するに最も相応しい材料であり、世界であった。

そうした主題が貫かれていればこそ、また日本古典文学にも、シェイクスピアを始めとする西

欧の劇文学にも造詣の深い、木下順二氏なればこそその知的財産の結晶ともいえる、文学的・芸術的完成度故にこの作品は、強烈な説得力と深い感銘を伴って、今を生きる私達への時空を超えた作者のメッセージとして、見事に現代を照射するのである。

作者は戯曲の冒頭と終幕に、満天の星の下での、ほぼ同一の次のような詞を用意している。

地球の中心から延びる一本の直線が、地表の一点に立って空を見上げるあなたの足の裏から頭へ突きぬけてどこまでもどこまでも延びて行き、無限のかなたで天球を貫く一点、天の頂き、天頂。

地球を南極から北極へ突き通る地軸の延長線がどこまでもどこまでも延びて行き、無限のかなたで天球を貫く一点、天の北極。

遙かに天の北極をかすめ遙かに天頂をよぎり、大空に跨って眼には見えぬ天の子午線が大宇宙の虚空に描く大円を、三八万四四〇〇キロのかなた、角速度毎時一四度三〇分で月がいま通過するとき月の引力は、あなたの足の裏がいま踏む地表に最も強く作用する。

そのときその足の裏の踏む地表がもし海面であれば、あたりの水はその地点へ向かって引き寄せられやがて盛り上り、やがてみなぎりわたって満々とひろがりひろがる満ち潮の海面に、あなたはすっと立っている。

作者は、いったん私達を天空の“子午線”の遙か彼方へ運ぶことによって、巨視的にこの地表を眺めつつ、“知盛”の意識の内外を逍遙させてくれるわけだが、終幕寸前に、今あなたが、あるいは私達が立っているその足元、この地表に、再びしっかりと戻されていることを、私達の誰もがはっと気づかされずにはおかないのである。

やはり、現代に生きる戯曲と言えよう。

若干の変化はあるが、冒頭と終幕でのこの詞のリフレインは絶妙である。そして初演以来、実際の舞台では序詞を、読み手Aとして宇野重吉氏が詠み、後詞は、影身を演じた女優として山本安英さんが詠んだ。贅沢といえまことに贅沢、この上なく絢爛であったと言えようか。

加えて、宇野重吉氏の、耳元に囁くような、訥々として素朴、どこことなく人間味のあるあたたかな響きの序詞と、山本安英さんの凜として美しく、天から降るか地から湧くかのような、どこか人間世界を超えた響きの後詞とが、えも言われぬ対比となり、また木下順二氏の作意も的確に伝達し得て、舞台の袖で何回聞いても私は胸を打たれたのである。